

佐用町昆虫館と与那国町立アヤミハビル館の連携による昆虫教育

吉田 貴大¹⁾・安達 誠文²⁾・森野 光太郎³⁾

1. はじめに

現代の若年世代において、理科離れの傾向が強く、特に昔と比べて自然に対する興味ははるかに薄れていると言われている。筆者らもこの若年世代に該当するが、同世代に「趣味は昆虫採集です。」と自己紹介すると、十中八九理解に苦しまれる。近年、『生物多様性』の保全の重要性が叫ばれているが、このような自然に無関心の世代には「むし」であり、そもそもの根本的な『生物多様性』の理解をすることが難しいと思われる。『生物多様性』を理解するには、まずは自然に目を向けることから始めないといけないだろう。そこで、『生物多様性』の理解を目的とした活動を施す際、身近で、世界の生物種の約四分之三を占める多様度を持った昆虫は題材として最適であると思われる。実際に、昆虫を題材とした観察会などの活動は地域の博物館や昆虫館を中心に実践されている。今回、筆者らは、遠く離れた地域の昆虫館の連携を利用した効果的な昆虫教育を立案、実践したので、ここに本企画の活動報告をする。

2. 企画概要

本企画は、佐用町昆虫館と、与那国町のアヤミハビル館との連携企画である。与那国町立与那国小学校と佐用町立三河小学校において、それぞれの地域で観察会を開き、観察記を共有することで、地元の昆虫の多様性と日本全体の昆虫の多様性を同時に学習しようというものである。観察会は夏と秋に分け、それぞれの季節の観察記を筆者が回収し、『交換観察記』という小冊子にしてそれぞれの学校に配布するという形式をとった。

兵庫県佐用町と沖縄県与那国町とは生物地理学的にも分布境界線の渡瀬線や蜂須賀線などを挟み、生物相は大きく異なる。このような生物相の異なる二地域において交流をすることで、同じ日本国内でもさまざまな昆虫が生息するということが効果的に理解できる。同時に、両地域とも昆虫館を拠点としているため、昆虫に深い理解のある指導員が観察会を導くことが可能となる。

3. 観察会の様子

1) 佐用町昆虫館 (佐用町立三河小学校)

三河小学校の夏の観察会は、2011年7月8日(金)に佐用町昆虫館にて開催した。三河小学校の理科の授業の一環として、三・四年生計22名(四年生10名、三年生12名)の参加となった。引率役として、三河小学校の先生方と筆者ら、そして、スタッフとして近畿大学の森下奈津子氏に来ていただいた。スクールバスを利用して13時30分頃昆虫館に到着後、まず、昆虫館の標本展示を閲覧させ(図1)、昆虫館の周辺にて昆虫採集をさせた(図2)。観察会終了後、館内にて採集した昆虫のスケッチとコメントを観察シートに記入させ(図3)、完成した者から館内を自由に見学させて、所定の



図1 標本展示の解説(佐用町昆虫館での夏の観察会)。



図2 観察会の様子(佐用町昆虫館での夏の観察会)。

¹⁾ Takahiro YOSHIDA 大阪府立大学生命環境科学部；²⁾ Masafumi ADACHI 近畿大学農学部；³⁾ Kōtarō MORINO 近畿大学農学部



図3 観察シートにスケッチしている様子(佐用町昆虫館での夏の観察会).



図5 ヨナグニサンの観察の様子(与那国小学校の観察会)撮影:水見拓磨先生.

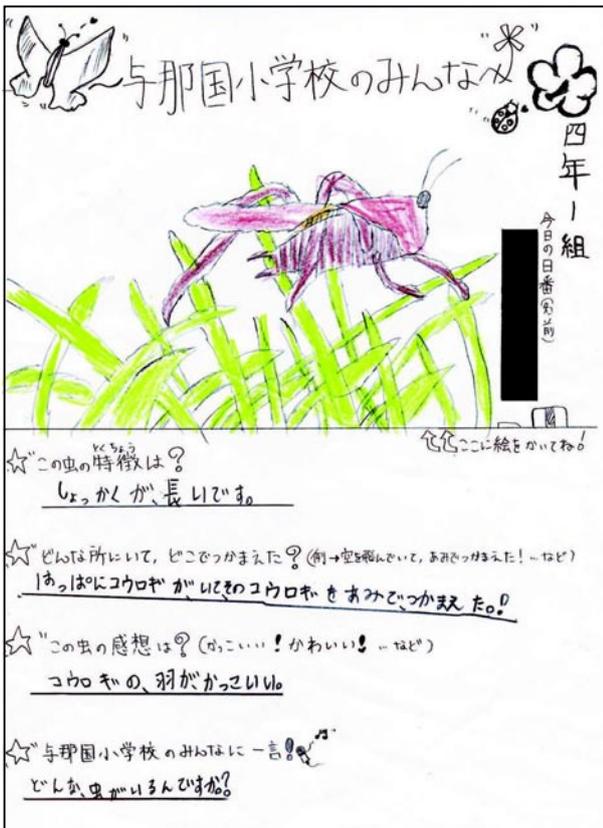


図4 完成した観察シート(佐用町昆虫館での夏の観察会).

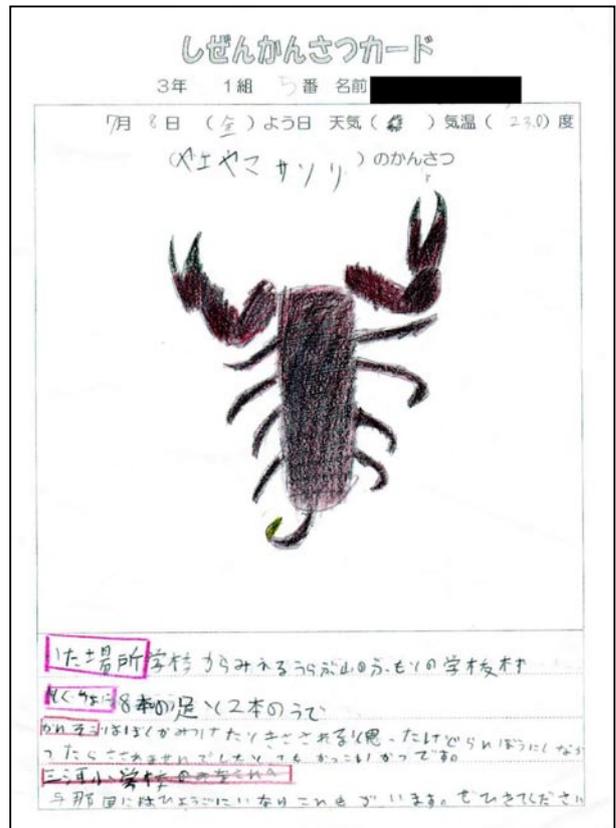


図6 完成した観察シート(与那国小学校の観察会).

15時30分に閉幕した。この観察会の様子は佐用町昆虫館のブログにも掲載した (<http://konchukan1.exblog.jp/16266196/>)。

観察会のコースはまず、館周辺の広葉樹林を抜け、開けた草地となり、広葉樹林林縁の草原の広場で折り返し、館に戻るという行程にした。コースの設定上、草原環境での採集の機会が多いためか、観察シートにスケッチされた種(図4)は直翅目が多く、22人中13人に描かれた。そのうち、ショウリョウバッタ(幼虫)が最も人気が高く、6人が描いていた。

10月7日(金)に開催された三河小学校の秋の観察

会では三河小学校の先生方と筆者ら、近畿大学の安達芳博氏で観察会を引導した。秋の観察会はタイムスケジュールや手順は夏の観察会と同様の形式を採用した。観察会の様子は佐用町昆虫館のブログに掲載している (<http://konchukan1.exblog.jp/16688564/>)。

2) アヤミハビル館(与那国町立与那国小学校)

与那国小学校の観察会は与那国小学校の水見拓磨先生とアヤミハビル館の村松稔専門員に引導していただき、観察シートと観察会の様子などの写真(CD-R)を郵送していただいた。与那国小学校はおおよそ週に一度、ヨナグ

ニサンの観察会を開き、観察会中に目撃、採集した生物を村松稔専門員が解説を施していただいた(図5)。その観察会にて観察した昆虫等(サソリや貝類も含む)のスケッチおよびコメントを観察シート(図6)に記入していただいた。

4. 交換観察記

各小学校の児童が作成した観察シートは筆者らが集め、『交換観察記』という小冊子にして各小学校に配布した。『交換観察記』の構成は表紙(図7)、導入、作品集(観察シート)、解説頁(図8)、写真集、まとめの全60ページとなった。導入部では、与那国町と佐用町の位置関係などを解説し、作品集には記入された観察シートをスキャンし、そのまま掲載した。解説頁には数種について取り上げ、分布などについての解説を施した。写真集には、観察会の様子や見られた昆虫の写真を掲載し、まとめには吉田のコメントを掲載した。

秋の観察会に関してはすでに両校において施しており、現在『交換観察記』の二部作目の編集作業に取り掛かっている次第である。

5. 課題と今後の展望

三河小学校三年生は、兵庫県立人と自然の博物館の企画「ひとく生き物かわらばん」に応募し、うち一名

は「研究員賞」を受賞した。これは、本企画が、地域の生き物を見つめるきっかけになったのではないかと考えている。また、11月16日、三河地区区長協議会・まちづくり協議会の場で、地元三河地域の区長さんらに、本プロジェクトの概要を紹介したところ、強い関心が得られた。学校や昆虫館の取り組みを地域の方々に知っていただくことも、とても重要であると感じた。

夏の観察会をまとめた『交換観察記』を見た三河小学校の児童から「日本にもサソリがいることに驚いた」という感想をいただいた。同じ国内にもさまざまな生物が生息しているという学習が狙い通りなされたという証拠になると思われるが、同時に昆虫以外の分類群も大きな学習効果を発揮するということが示唆された。三河小学校との観察会では昆虫限定とはしていなかったが(実際にナガコガネグモなどをスケッチした児童もいた)、今後は昆虫以外の分類群も積極的に解説を施す姿勢を持つべきであると感じた。

今回は、兵庫県佐用町の佐用町昆虫館と沖縄県与那国町のアヤマハビル館との連携でこの二地域での交流も交えた昆虫教育が実現したが、来年度からは北海道遠軽町の丸瀬布昆虫生態館との連携を加え、南北に長い日本の昆虫相をより良く理解できる観察会としたい。丸瀬布昆虫生態館とはすでに協議し、快諾を得ている。同時に、今回の観察会とは少し離れるが、三館の連携の一環とし



図7 『交換観察記』の表紙。



図8 『交換観察記』の解説頁。漢字には読み仮名を振ってあり、小学生の読みやすい文体としている。

て、展示企画による『生物多様性』の理解の推進を施したいと考えている。遠隔地の小学校同士の交流において、テレビカメラを用いた交流が最近頻繁に施されているようである。今後の展望として、本企画でも交流している小学校同士でテレビカメラを通じた交流を取り入れることができれば、より印象的な交流として記憶に残せるのではないかと考えている。

企画メンバーは現在三人であるが、『交換観察記』の編集作業において、人手不足を感じた。次年度の活動に向けてメンバーの増員を考えている。このような地道な観察会を各地で開催することで、一般の方々が自然に目を向けてもらい、『生物多様性』の理解を推進し、ゆくゆくは筆者らの同志たちが胸を張って「昆虫採集が趣味です!」と自己紹介できる日を夢見ている。

6. 謝辞

本企画において、連携を快諾していただいたアヤミハビル館の専門員である村松稔氏、与那国小学校の観察会を主導していただいた与那国小学校の水見拓磨先生、三河小学校の観察会を主導していただいた三河小学校の吉田彰子先生、石原恵子先生、三河小学校用の観察シートをデザインしていただいた嶋奈津子氏、観察会のスタッフとしてご助力いただいた近畿大学の安達芳博氏、森下奈津子氏、三河地区区長協議会で説明の場を設けてくださったNPO法人こどもとむしの会副理事長の三木進氏と区長各位、運営方法に関して非常に有益なご助言をいただき、さまざまな便宜を取り計らっていただいた兵庫県立人と自然の博物館の八木剛主任研究員に厚くお礼を申し上げるとともに、これからの活動にも陰に陽にご助力賜ることができれば無上の喜びである。また、本企画は花王・コミュニティミュージアム・プログラム2011の助成を受けて実施された。